

ワサビ栽培でのIPMを活用したアオムシ防除（静岡県）

1 概要

- ・ワサビは和食を代表する食材であるが、今や世界中でその風味が親しまれている作物である。
- ・清流を引き込んだワサビ田等で栽培されるため、静岡県では豊富な清流を生かしたワサビ栽培が盛んで、栽培面積128ha（2000年：国内シェア60%）、根茎生産量227t（同43%）、産出額32億円（同78%）と日本を代表するわさび産地である。
- ・このため、同県では水系の環境を維持しつつ、安定した生産を維持するため、IPMの活用による害虫防除を推進している。

2 農薬のマイナーユース※に対するIPMの活用 ※マイナー作物またはマイナー病害虫への施用

(1) マイナーユースの問題点

- ・ワサビはマイナー作物であり、アオムシ等の害虫に使用できる農薬が少なく、安定生産が困難な問題がある。
- ・ワサビ田での化学農薬の使用は水系環境への影響が懸念されるため、ワサビ田への農薬登録が困難な場合がある。

(2) IPMを活用した問題解決に向けた原動力

- ・ワサビ生産ほ場下流域の水系の農薬汚染を防止し、産地全体の環境を保護するために化学農薬の使用が制限される中、IPM技術として微生物農薬（BT剤）の活用ニーズが高まった。
- ・また、化学農薬の使用によるアオムシ防除等へ苗処理剤（セルトレイ苗灌注処理剤）等の導入が検討された。

(3) 成功要因

- ・微生物農薬（BT剤）は、登録農薬として、アオムシに対し防除効果や環境影響等が確認されており、現地実証試験により生産現場に適した防除体系を確立することができた。
- ・また、生産者を対象とした講習会の開催により、本IPMの有効性と効果的な使用方法が生産者に理解され、本IPMの活用が促進された。

(4) 取組みにおける障害、今後の課題

- ・ワサビの苗処理剤については、処理苗からの薬剤の溶出の問題があり、使用条件の設定に時間を要し、農薬登録が遅れている。
- ・BT剤の使用については、適期散布を逃したことによる防除の失敗例もみられ、今後、適正使用の指導が必要である。

(5) 得られた経験

- ・生産者、行政機関等関係機関一体となったIPMの推進が重要であることを改めて認識した。

3 成果

- ・BT剤を用いた年間4～5回の防除体系により、アオムシ被害が大幅に軽減された。
- ・IPMの導入により、水系の汚染を最小限に抑え、安定した生産を維持し、日本を代表するワサビ産地を形成。



図1. 高品質なわさび



図2. わさびを加害するアオムシ



図3. アオムシに加害されたわさび

【問い合わせ先】
農林技術研究所伊豆農業
研究センターわさび科
電話：0558-85-0047